

朝鮮の「手無し娘」の歴史

松原孝俊

—

本稿の目的は、朝鮮半島における「手無し娘」(The Maiden without Hands)譚研究の現段階を紹介しつつ、東アジアの類似伝承との比較を通して、朝鮮の「手無し娘」譚の系譜を論ずることにある。

グリム童話などでもあまりにも有名なので、いの「The Maiden without Hands」(AT706)の筋書きの紹介は省略するが、いの数年日本の口承文芸学界の動向を見ると、東アジアの「手無し娘」の分布研究はかなり精密になって来ている。

そのなかでも火付け役を果たしたのは、「伝播論」の立場からの

三原幸久の研究であった。早くから柳田国男、中山太郎などによて、日本の「手無し娘」譚と西欧の類話との密接な関連が暗示されてきたが、この分析視点の延長線上で、三原は日本の「手無し娘」譚の伝播経路とその時期について、きわめて大胆に一つの仮説を提出した。まず第一段階の基礎作業として、トンプソンらの研究にア

ジアの資料を追加した上で、世界の類話は「1500話以上」であると、三原は推定する。次ぎに彼は世界における類話の地理的分布と、資料の新古を探しながら、日本の資料の特色を浮き彫りにしようとしました。その結果、西欧の類話が12世紀を起点とするのに対し、日本的事例が明治2年の『高野山女人草由来記』までしか遡れない点と、日本に至る伝播ルートであったと思われるフィリピン・ミクロネシアなどの地域に幾つかの注意すべき事例があるとして、

「いの物語（松原注：「手無し娘」）は南蛮人の渡来以後、鎖国までの間に、南蛮人によって我が國に伝えられたと考えるのが最も妥当な意見であろう」（三原幸久、1989年、262頁）

という作業仮説を提出し、日本の「手無し娘」の故郷は海外にあると説明した。

いの三原幸久の見解を受けて、日本の類話研究に関して、安藤昌江と小池ゆみ子の二人が相次いで労作を発表した。二人と共に通するのは、日本国内での類話の熱心な探求である。『日本昔話大成』全12巻、(1978年～1980年)と『日本昔話通観』全29巻（1977年～1986年）が刊行された後、おおよその分布状態は容易に掴める

ようになつてきているが、むろん両書だけで十分であるはずがなく、国内の諸資料を博搜しながら、類話の発見に努めた結果、安藤は120話、小池は92話を報告している。

もっとも二人の関心の所在は異なつており、安藤昌江の関心は日本での文献上の初見資料である『高野山女人堂由来記』(明治2年)にまつわる疑問点の探究にあつたと思われる。すなわち安藤自身が述べているように、三原の作業仮説に触発された、

「高野聖が南蛮渡來の昔話を女人堂の由来記にでつち上げたのだろう」(安藤昌江、1991年、45頁)

という発想の検証が、安藤の強い関心であつたらしい。結果的には三原の作業仮説と『高野山女人堂由来記』との接点を見出し得ないままに終わっている。

一方、小池ゆみ子の主な関心は、92話の話型分析とその地理的分布図の作成、そしてその意味の追及である。とりわけ圧巻は18項目にわたる丹念な地理的分布の作成である。この労作によって一目瞭然に判明する地域的特色の指摘は、たとえ資料の発掘が地方によつて偏在していたとしても、かなり説得力を持つ基礎作業となつてゐる。小池の調査によると、これまで漠然と考えられていた点、たとえば日本の「手無し娘」譚のモチーフ構成について、タイプロジーを試み、一つのタイプを「主人公が手紙の書き替えにより追放によるモティーフのある形」(A型)とし、もう一つは「モティーフの欠落した形」(B型)とした。この調査結果は、

「この話型の一つの特徴は、明らかにモチーフの欠落だと分か

る一部の類話を除いて、モチーフ構成に大きなバリエーションがない。すなわち非常に齊一化された形を持っていることである」(三原幸久、1989年、246頁)

という見通しを裏付けるものとなつてゐる。興味深いのは、小池が直接的な言及を避けつつも、日本の「手無し娘」譚が弘法大師信仰や觀音信仰との強い繋がりを持っていることに触れ、この説話の背後にある宗教的性格、もしくは説話の管理者たちへの関心を喚起していることである。

二

ところで朝鮮半島を含めた東アジアの類似伝承を考察するに当たって、重要な貢献をしたのは、斧原孝守であった。⁽⁴⁾前述した三原幸久の先駆的研究によつても、古くからヨーロッパとアメリカ大陸を中心とした類似伝承の分布研究はかなり進展してゐるもの、その半面ではなはだ手薄な地域が東アジア地域、とりわけ中国大陸東北部であった。すでに中国大陸を中心とした「稻羽の素戔」や「犬頭糸」「猿蟹合戦」などの比較研究で目覚ましい成果を上げていた斧原は精力的な調査を行い、とりわけ中国大陸東北部での類似伝承の分布状態の解明に努めた。彼の中間報告によると、吉林省(漢族)、遼寧省(滿族)、内蒙古(ダーフール族)、内蒙古(蒙古族)、遼寧省(朝鮮族)、伝承地不明(漢族)の6例が発掘できたと言ふ。しかも併せて、

- ① 類話の分布が東北地方に偏在していること、
 ② 類話を伝える民族が多用であること、
 ③ 類話の内容に変化が少ないこと、
 ④ 類話の報告が新しいこと

の4つの特色をも指摘した上で、中国大陸東北部における「手無し娘」の基本形式を次ぎのように設定する。

1 繼母が娘を憎み、娘が私生児を生んだとみせかけ、娘の手を切って追い出す。

2 娘はある家で果物を食べているところを、その家の息子にみつかり、やがて息子の嫁になる。

3 夫は科挙の受験にでかける。

4 夫の合格を知らせる（または娘の出産を知らせる）手紙が、娘の継母によって書き替えられる。

5 娘は子供を連れて家を出る。

6 娘が川に入水しようとすると（または川に落ちようとしたとき）、手が再生する。

7 夫は妻子を探し出す。

8 継母は処罰される。

そして中国大陸東北部に接するモンゴルでの事例については、Lorincz, Laszlo の "Mongolische Marchentypen. Asiatische Forschungen" を引用して、5例だけを提示す。¹⁵この説話類型によると、モンゴルの類話は中国大陸東北部の「手無し娘」の基本形式と大同小異であり、共通していると考えて良いと言つ。その上で、

「モンゴルの類話が、日本人によって中国東北地方に伝えられた話が、さらにモンゴルに伝わったものであるとは考えられない。むしろモンゴルに伝わっていた「手無し娘」が、モンゴル民族によって内蒙占を経て中国東北地方に伝えられ、当地に住む諸民族の間に伝播したものであると考えるべきであろう」¹⁶
 (斧原孝守、1990年7月、2頁)

という見通しを発表している。

我々の最も興味を引かれるのは、娘の手を切るモチーフや手紙のすり替えモチーフなど「手無し娘」譚を特徴づけるモチーフとともに、東アジアの類似伝承に共通するモチーフとして、小動物を利用した「偽の赤子」モチーフと「夫の科挙受験」モチーフの存在があるという、斧原の指摘である。そしてこの小動物を利用した「偽の赤子」モチーフは東アジアのみに伝承される特異なものであるといふ。

さて、これまでに発表された三原幸久と斧原孝守の二人の研究に共通なのは、東アジアの類話の分布状況を考える上で、中国東北地方と日本との中間地帯にある朝鮮半島については、わずかに崔仁鶴の『韓国昔話の研究』(1976年刊行) 所載の No. 452 「手無し娘」(任督宰採集)の一例を引用するだけで、その後の朝鮮半島における説話研究の成果がほとんど参照されないままであった。しかも原典がいかなる性質の資料であるのかについても、まったく情報入手できないままであった。誇張表現かもしれないが、いわば朝鮮半島は情報の空白地帯であったし、中国大陸東北部と日本との中間に

位置するミッシングリンクであった。こうした資料の質量両面にわたる弱点を痛感する研究者たちであったが、それでも三原幸久は、

III

「[おじい]の一例だけならば、恐らく韓国の『手無し娘』はそれ

ほど昔からの伝承では無かったのではないかと思われる」(三

原幸久、1989年、259頁)

と論じた。もともとこの「昔からの伝承ではなかった」とは、

いつたい何時までが「昔」なのか、そしてそう判断する理由は何か、

については明言が無い。したがって韓国の『手無し娘』を外来说で

説明すべきであるとの三原の基本的立場は類推できるとしても、そ

の伝播の時期について、あるいは日本に関する発表した自説との関わりについても言及無いまま、どうやら韓国での報告資料数の少なさから自らの判断を留保したものと思われる。

一方、斧原孝守は、断定を避けつつも、夫が科挙を受けに行くと言つ、中国東北類話群に特徴的なモチーフの一つを伴つてゐることを唯一の根拠として、

「朝鮮の類話は中國東北類話群より派生したものである可能性
が強いといえよう」(斧原孝守、1990年7月、1頁)

とさえ推測している。

どうやらこうした論者の見解の検証も、我々の課題と言わなくてはならない。したがって、本稿のもう一つの狙いは、東アジアの説話研究において、各地域の専門家によって、手薄な分野は補填しあい、材料を提供しあい、そして相互の研究を深化させる共同研究の必要性の強調にもある。

朝鮮半島から報告された唯一の事例として、日本で古くから知られたのは、前章でも紹介したように、崔仁鶴著『韓國昔話の研究』(1976年刊行)所載のNo.452「手無し娘」であった。この貴重な事例は、

任哲宰『昔話(イエンナルイヤギ)選集』第3巻、教学社、

1971年、182~187頁

に所収されたものであった。しかしながら、日本の研究者にとって、この資料は崔仁鶴による梗概でしか知り得ず、細部に渡る叙述が不明のために、あたかも靴を隔て痒きを搔くかのごとくであったであろう。では、この任哲宰の資料はどういう類いのものであつたろうか。それは元来子供向けの読み物であった。そのためには、テキストへの筆者の手が加わっており、子供にとって不要と思われる箇所を削除するなど、研究資料としての使用にとうてい絶え得るもので無かつた。それが長い間、朝鮮半島における「手無し娘」研究が出来なかつた理由であった。

今日では、韓国を中心採集された2万5千とも3万話に達する説話総数の中から、次の五事例が報告されている。

資料1 「繼母に腕を切られて追い出された娘」任哲宰『韓國口伝説話』(平安北道1) 平民社、1987年、131~139頁

任哲宰の補足説明によると、この伝承の類話が次の通り採

集できたと言つ。

1937年1月 平安北道宣川郡新府面大睦里 金信永
1937年7月 平安北道鉄山郡扶西面石山里 鄭聖即

1938年1月 平安北道龍川郡東下面三仁里 文信珏
伝承者はすべて信聖学校の学生であり、任哲宰からの直話

によると、これらの伝承は学校の夏休みなどの課題作文であつた（1991年8月）。ここで問題とすべきは、上の伝承は一体誰の提出物であったかという点である。予想すべきは、特定の一人でなく、3名の伝承の再整理したものである可能性である。

なお、明言は避けなくてはならないが、上記した1971年のテキストのオリジナルが、この信聖学校の学生たち3名の口頭伝承のいずれかであったに違いない。

資料2 「手無し娘」『韓国口碑文学大系』1-9、1984年、254

鄒貞、〈説話採集地・京畿道龍門郡〉

伝承者吳スヨンはハングルも知らない教育水準であると言ふ（当時、68才）。

彼女が14～5才のときに、曾祖母から、この話を聞いたと言つ。1930年代の初めか？

資料3 「前妻の娘を策略で傷付けた悪党の繼母」『韓国口碑文学大系』7-13、1985年、332～347頁、〈説話採集地・慶尚北道大邱市〉

伝承者金ウムジヨンは当時68才。もともとは慶尚北道金堤市出身。13年前に大邱に移住。老人学校の「語りの大

会」でも、一等に入賞したことがあると言つ。話の伝来経路については調査者の言及なし。

資料4 「繼母に追い出された手無し娘」『韓国口碑文学大系』7-14、1985年、684～694頁、〈説話採集地・慶尚北道達城郡〉

伝承者金玉蓮は当時50才。17才で現住所に移る前は、慶尚北道高靈郡と星州郡に居住したと言つ。学校教育は受けていよいよである。話の伝来経路については調査者の言及なし。

この事例に加えて、梗概しか知りえないので、中国の朝鮮族が語り伝えていたものを加えても構わないであろう。

資料5 「無手姑娘」（梗概）『金永順故事集』上海文芸出版社、1982年、44～45頁

四

この朝鮮半島で採集された五つの資料に対し、現在までに、2編の関係論文が発表されている。⁽⁵⁾本稿では、1937年に平安北道で任哲宰が採集した最古のテキストを構成要素別に分解し、それに異伝を付け加えた、曹喜雄による試みを次ぎに紹介することとした。

モチーフ 〈注：数字は資料番号〉

1 繼母が前妻の娘を憎んで、苛め抜く。（①②③④）

2 繼母は皮を剥いた鼠を継子の衣服の中にいれて、継子が子供を堕したと言いふらした。（②④）

- 3 繼母の強い願いで、父親が娘の両手を切り落とす。 (①②③)
 4 a 切り落とされた手は何処かに飛んでいった。 (①②③)
 b 鳥が尋ね求めていく。 (①)
 c 俵にいれ、水に浮かべて、捨てる。 (④)
- 5 a 手を切り落とされた姉を、義弟が水の中に突き落して殺そうとする。義弟はどうしても出来ずに、姉が出ていくのを見送る。 (④)
 b 追い出された娘が山の中を彷徨う。 (⑤)
 娘は金持ちの家の柿の木に上って、柿をすっかり食べてしまう。 (①②③④)
- 6 金持ちの家の息子が「手無し娘」を匿す。 (①②③④)
 奇妙に思った家族たちが息子の部屋を探索するや、息子は事実を述べ、「手無し娘」と結婚する。 (①③④)
- 7 夫が科挙を受けに出かけた後、「手無し娘」が子供を生む。
 8 その知らせを持って出発した使いの者が、偶然に継母の家に宿泊した。継母は手紙の内容を「怪物を生んだのや」、「手無し娘」を追い出しましよう」と書き直した。「帰つてくるまでも、「手無し娘」をそのままにしておけ」という夫の返信を、再び継母が「手無し娘」を追い出せ」と直した。(①③)
 a 夫の母が仕方無く「手無し娘」に、子供をおぶされて出でないと命じた。(②③④)
- 11
- 12 b 「手無し娘」は実家に向かった。 (②)
 13 落ちそうになった子供を支えようとした瞬間、「手無し娘」の手が蘇った。 (①②③④)
- 14 帽子が一人の老婆の家に吹き飛ばされたことを機縁に、その家に滞在するようになった。 (①②③④)
- 15 帰宅した夫が「手無し娘」を探しに出掛けた。 (①②③④)
 16 夫が偶然にある所にいくと、自分を父と呼ぶ（もしくは自分とよく似た）子供が出会った。 (②③④)
- 17 夫婦が再会した。 (①②③④)
- 18 繼母を処罰して、「手無し娘」には幸せに暮らした (①②③)
 (④)
- なお、梗概しか分からぬために、資料5の全体像は不明だが、
 <1, 3, 4-A, 7, 11-A, 12, 13, 17>で構成されていることだけは確実である。しかしながら世界の「手無し娘」に特徴的なモチーフ10の「偽の手紙」について言及がなく、しかもモチーフ2の「動物による偽の赤子」はどうやら含まれていなかつたようである。
- ところでいうしたモチーフ表をもとにして、比較説話学の立場から、東アジアにおける朝鮮半島の「手無し娘」譚の特色を考えると、やはり何と言つても注目されるのは、中国東北部・モンゴルの類似伝承に特徴的な、小動物を利用した「偽の赤子」モチーフと

「夫の科挙受験」モチーフの二つを共有していることである。この

点は、小池が精密に調査した日本の話型と大きく違い、しかも日本の周囲でも、三原幸久が着目したフィリピンなどに伝承されてきた類話とも異なるものであった。そうであれば、朝鮮半島の類話群と

中国東北地方の類話との類縁性は否定しがたく、斧原孝守のように、「モンゴルに伝わっていた『手無し娘』が、モンゴル民族に

よって内蒙占を経て中国東北地方に伝えられ、当地に住む諸民族

族の間に伝播したものであると考えるべきであろう」

と考え、さらに

「朝鮮の類話は中國東北類話群より派生した」

と考えるかどうかは、断案を保留することとしても、朝鮮半島と中國東北地方の両地域の間が無関係であつたはずがない。

したがつて「偽の赤子」モチーフがモンゴル・中国東北地方・朝鮮半島・奄美諸島にのみ分布することの意味と理由を、次の課題としなくてはなるまい。

五

ここで思い出すのは、朝鮮古典小説の『薔花紅蓮伝』である。確

かに繼母が登場する点で一致するものの、朝鮮古典小説『薔花紅蓮伝』は口頭伝承「手無し娘」と一見してストーリーも登場人物も大きく相違する。しかしながら説話構造を見たとき、たとえ共に繼母型モデルの上に構想されているとしても、後述するように両説話の

類似は、とうてい偶然の一致とは思われないほどである。しかも、なによりも、小動物を利用した「偽の赤子」モチーフが、両者と共に見出だせるからである。

そこで次ぎに我々の視野を拡大して、古典小説『薔花紅蓮伝』を取り上げて、口頭伝承「手無し娘」との関わりを考えてみることにしたい。

まず『薔花紅蓮伝』の異本は、現存する資料を見るかぎり、三種類に区別して考えられる。ハングル本そして漢文本・国漢文本である。これら三種類のテキストに関する考察を終了した後に、当然に本論に向かわなければならぬが、紙面の関係上、文献学的な考察はすべて割愛することとしたい。⁽⁶⁾ 本稿では、ハングル本である『薔花紅蓮伝』世昌書館本（1915年5月24日刊）の要約を次に紹介したい。

「世宗代（1419～1450）に、平安道鉄山郡に藝武龍が住んでいた。長い間、彼は子供に恵まれなかつたが、ある日、婦人の張氏が仙女の夢を見た瞬間に、子供を宿つた。長女が薔花であり、次女が紅蓮である。二人の子供の孝行は並々でなく、一家幸せであった。

しかしながら不幸にも夫人の張氏が一人の子供を残したまま、急死した。やむをえず、父の藝氏は後妻の許氏を迎へ、さらに三人の子供が生まれた。次第に繼母の許氏は繼子の薔花と紅蓮の二人を虐待しあはじめ、ある時には、鼠の死骸を用いて薔花が

落胎したと偽るほどであった。

ついに繼母の凶計によって、薔花は家を追放されたばかりでなく、異母弟の手で池の中に投げ込まれ殺害された。夢の中で姉の異変を知った妹の紅蓮は、青鳥の案内で池に辿り着くが、自分もその池に身を投げて死んでしまった。薔花と紅蓮の兄弟は怨魂となって、鉄山郡庁に現れ、自分たちの怨恨を哀訴するが、誰も聞き入れてくれなかつた。新任の府使の鄭東祐が薔花と紅蓮の怨鬼の願いをかなえ、眞実を明らかにし、繼母の許氏を処罰した。

その後、父の後妻である尹氏の子供として、薔花と紅蓮は生まれ変わり、しかも府使鄭東祐の一人の子供と結婚し、以後、一族は栄華を極めたという。」

この『薔花紅蓮伝』の成立をめぐっては、これまでの専門家の研究によつて、かなり判明している。その中でも、孝宗年間(1644~1661)に平安北道鉄山府使であった全東屹が実際に処理した薔花と紅蓮の冤死事件を素材にして、この小説が作り出されたと言ふ点は、衆目のほほ一致するところである。⁽⁷⁾

ところで『薔花紅蓮伝』の成立に関連して、朝鮮文学研究者の金台俊は、「薔花紅蓮伝はせいぜい七、八十年足らずの間、主として京城附近に流布している伝説を拾い取つて、小説にまで敷衍されたのであろう」(金台俊、1940年、p.86)と述べている。なるほど金台俊は彼の推定の根拠を提示しなかつた

ばかりでなく、元の種となつた伝説の概要を紹介していない。しかしながらもしこの金台俊の推定が正確なものであるならば、我々の考察の対象である古典小説『薔花紅蓮伝』は 1870~80 年ごろを下限とし、そして最初の活字本が刊行された 1910 年代を上限として、その 30~40 年間に京城附近に流布する伝説が小説化されたと考えなくてはならない。今、ここでは、金台俊が推定した年代に拘泥しないでおこう。というのも彼が立てた推論には、年代比定のための明白な根拠を欠くからである。だからといって、古典小説の成立に関する彼の仮説のすべてを、全面的に打ち消す必要はないと考える。

では『薔花紅蓮伝』に取り入れられた「京城附近に流布している伝説」とはいったい何であつたかが問題となる。そこで、「表」に見る通り、古典小説『薔花紅蓮伝』の前半部を構成するモチーフとほぼ一致していることから考えて、もしその説話が、口頭伝承「手無し娘」譚であつたと仮定した場合⁽⁸⁾、我々の当面の課題に対して、どのような想定が可能であろうか。

むろん両者に存在する相違点を認めた上である。とりわけ繼母による虐待として古典小説『薔花紅蓮伝』は最悪の死に至らしめているのでに対して、口頭伝承「手無し娘」譚は両手を切断し、家から追放すると言う手段を取つてゐる。一見すれば、この相違は大きいやうに見えるが、しかしながら朝鮮古典小説の常套手法を知るものにとって、一方から一方への自然な移行であると言つて良いだらう。というのも、多くの朝鮮古典小説が、『靈應伝』(『太平廣記』所収)

[表1]

薔花紅蓮伝	手無し娘
幸福な家庭	幸福な家庭
母の夢＝懐胎	
母の死	
繼母との再婚	母の死
繼母による虐待	繼母との再婚
異母弟の出生	繼母による虐待
鼠の死骸によるトリック (私生児と偽装)	異母弟の出生
薔花に対する殺害命令	鼠の死骸によるトリック (私生児と偽装)
異母弟による薔花殺害	女主人公に対する殺害命令
女主人公は池で水死	父親が女主人公の手を切断
虎患により異母弟の耳・手足 の切斷	
薔花は水中の幽鬼となる	
青鳥が紅蓮を案内す	追放
紅蓮が池に投死す	
薔花紅蓮が府使に崇る	

[表1 つづき]

薔花紅蓮伝	手無し娘
府使による裁判	
薔花紅蓮が府使に榮達を約束す	
薔花紅蓮の転生	
ハッピィエンド	
ハッピィエンド	

や『寶城鬼』(元曲)などに用いられた「幽靈冤魂の役所出現モチーフ」と、朝鮮古典小説『淑香伝』や晋唐小説によく見られる「青鳥案内モチーフ」(金台俊、p.89)、そして転生モチーフなどで組み立てられている。こうした既存の物語の枠組みで『薔花紅蓮伝』を古典小説化しようとしたならば、どうしても死は免れず、たんに両手を切断しただけでは、とりわけ好まれた幽霊譚へと話は展開できないにちがいない。

結論から先に言えば、朝鮮半島の口頭伝承「手無し娘」が古典小説『薔花紅蓮伝』の成立になんらかの影響を与えたとしたならば、この小説が成立したと推定されている時期、すなわち1870～80年ごろを下限とし、1910年代を上限とする時期に、この口頭伝承はある地域で(京城か?)で語り伝えられていたと考えられ、しかかも次の想定も可能である。

それは古典小説『薔花紅蓮伝』の最初のテキストである漢文本

(1865年編纂の『嘉慶事実録』所収)が「歲戊寅臘月古潘南朴慶壽謹書」とあり、この記述に従えば、「歲戊寅」に成書化された事が

分かる。とすれば、この「戊寅」が一体何時かが問題となるものの、可能性ある説として、肅宗代の戊寅(1698年)・英祖代の戊寅(1758年)そして純祖代の戊寅(1818年)の3つがある。我々の立場からすれば、禹快濟の説を支持して、純祖代の戊寅つまり1818年が最も可能性ある説であると考え(禹快濟、1988年、266頁)、少なくともこの年に口頭伝承「手無し娘」が朝鮮半島で伝承されていたと推定できることになる。言い換えれば、説話の出発地

がどいであるかは詮索しないものとすれば、朝鮮半島への流入時期の下限を憶測できるかもしれない。もし、この戊寅が1698年もしくは1758年であるとすれば、それぞれさらにその下限が繰り下がるに至る。

以上の想定が大筋において誤りがなければ、朝鮮半島の類話が文献で押さえられる範囲内での、東アジアでの最古の事例であると言つても過言でない。むろんこれは暫定的な作業仮説にすぎず、口頭伝承「手無し娘」と古典小説『薔花紅蓮伝』とが全く無縁でもあります。

六

そしてその後の数年間の翻訳状況をリスペクトにおいてみると、次のようになる。

1 黄天錫・訳『学生界』1号、1920年
2 方定煥・訳編「愛の贈物」開闢社、1922年

(9)

して定着した可能性を追及してみたいと思つ。

この問題を設定するとき、我々の念頭におべきは、1910年から1945年までの朝鮮半島の言語環境である。いうまでもなくその間の日本による植民地統治が前提となるうし、しかも朝鮮総督府による言語政策を知つておかなくてはならない。したがつて、我々は、たんにハングルで記された翻訳本だけでなく、日本語をして漢文による受容も想定しなくてはならないし、また芝居と語り物の言語にせよ、同様に考える必要があろう。

まずは朝鮮語による受容と普及から取り上げることにしたい。この点については、すでに朱鐘演による調査があるので、次にそれを紹介することとした。朱の調査結果によると、1920年7月に吳天錫によって初めてグリム童話が朝鮮語に翻訳されたと語つ(朱鐘演、1980年、195頁)。

1 黃天錫・訳『學生界』1号、1920年
2 方定煥・Sechse Kommen durch die ganze Welt
壮士の話

そしてその後の数年間の翻訳状況をリスペクトにおいてみると、次のようになる。

前章とは違つて、本章では、グリム童話系統の「手無し娘」が近代になって朝鮮半島に流入し、誰かの手で翻案され、朝鮮の説話となりつる。

(1) 眠り姫
.....Dornröschen
(2) 蛙王子

.....Der Froschkönig oder der Heinrich

(3) 天國く行くへ物

[第26～28回]Tishen deck dick, Goldesel und knup-

pel aus dem sack

.....Der Meisterdieb

[宿駅くけき]

(4) ジャーハン商売人

[第29回]Jorinde und Joringel

.....Der gute Handel

[第30回]Frau Holle

(5) 黄金のカサマウ

[第31回]灰おみれの母姫

.....Die goldene Gans

[第32回]Aschenputtel

(6) 三半ヘ狼

[第33回]雌鶴の死

.....Die Wolf und die sieben jungen gelein

[第34回]Von dem tote des

(7) 千両の外題

[第35回]Lauschen und Flohchen

.....Rumpelstilzchen

[第36～37回]Von dem Fisher und sein Frau

(8) 雜誌『東語』連篇記譚 1923年

[第38回]Fischer und Flohchen

(1) 三半ヘ狼

[第39回]Ehe im Hause

(2) 蝙蝠

[第40回]Von dem Machandelboom

(3) 六の開いた靴

[第41回]Von dem Rotkäppchen

(4) 第22回

[第42回]Von dem Rotkäppchen

(5) 第23回]Die zertanzten

[第43回]Von dem Rotkäppchen

(6) 第24回]Die Bremer Stadtmusikanten

[第44回]Von dem Rotkäppchen

(7) 第25回]Katze und in Gesellschaft

[第45回]Von dem Rotkäppchen

(8) 第26回]Ritter und Ritterin

[第46回]Von dem Rotkäppchen

この題の課題である「半無し娘」が朝鮮語に初めて翻訳されたのは、
朝鮮民族出版社 1965 年に金聖道の「グリム童話」(全 6 卷) クク書
館の第 2 卷に記述された「半無し娘」であると思われる(朱鐘演、
1992 年、24 頁参照)。されば、口語訳本「半無し娘」がグリム
童話の朝鮮語版による書承・歌詞でせあるべきことになる。

この 1920 年代の朝鮮語への翻訳が日本語からの重訳であるとほぼ認定されている以上（朱鐘演、1980 年、211～216 頁）、つぎには順序として、朝鮮半島での日本語訳からの書承・受容を想定すべきであるし、当然グリム童話の「手無し娘」が最初に日本語訳されたのは何時であったかが、問題となる。この点に関しては、すでに小池ゆみ子の綿密な調査によって、明治 24 年（1891）に出版された洪江保の『西洋妖怪奇談』であったことが判明している。良く知られている大江小波編『世界お伽噺 第 48 編 手無し娘』が『フィンランンドお伽噺』から訳出されたのは明治 36 年（1903）であったが、今、ここでこの「手無し娘」だけの翻訳の歴史を記す必要はなかろう。というのも、小池ゆみ子も日本の事例に関して指摘しているように、「本稿で取り上げた口承話 92 話は、グリム童話も含めて翻訳本による影響はほとんど受けていないといえる。」（小池ゆみ子、1991 年、146 頁）

のは、ほぼ間違いなく、その上に日本の事例（奄美諸島を除く）が朝鮮半島および中国大陸東北地方・モンゴルなどの事例に特徴的な（動物を利用した）偽の赤子モチーフ」を含んでいないことが明白だからである。

とすれば、今後、特別な資料が発見されないかぎり、グリム童話の日本語訳からの書承・受容を経て、朝鮮半島にこの「手無し娘」が普及したと考える材料はなく、その可能性は否定されなくてはならない。⁽¹²⁾

なお、朝鮮半島へのキリスト教の伝来が中国を経て、フランス系

の宣教師の手でもたらされたことを考えたならば、宗教の布教活動の一貫として、漢文に翻訳されたグリム童話の存在も推定してるべきかもしれない。しかしながら肝心な漢文で記された説話資料が発見できていない段階では、後考を待つほかない。⁽¹³⁾

七

さて、ここで研究の視線を朝鮮半島の北に向けてみようと思う。その時、まず我々が想起すべきは、前述したように、朝鮮半島の類話が中國東北部から派生したと考える斧原孝守の試案であろう。というのも斧原が指摘したように、モンゴルも含めた地域に分布する「手無し娘」に、共通して「動物の死骸を利用した」偽の赤子」モチーフが存在しているからである。

あらかじめ述べておきたいが、現在でも、斧原の見通しを立証する物的証拠は何一つない。ここで論議したいのは、一つの説話の関連を論ずるのではなく、両地域に束となって発見できる説話群の存在を確認し、そこからどのような意味を見出だすのか、という点である（小島櫻穂、1981 年、21～26 頁参照）。

ところで既往の研究を振り返ってみると、比較研究の視点を明白にとりつつ、朝鮮半島とユーラシア大陸東北部との関連を論じた研究者に、孫晋泰がいる。孫によると、両地域に共通して見出だされている説話が 6 つあるという。すなわち①大戦争伝説・洪水説話、②犬猫の宝珠奪還説話、③地下国大賊退治説話、④朝鮮の日月伝説、

⑤悪い虎退治譚、⑥興夫伝：「腰折れ燕」の6つである（孫晋泰、1946年、85～138頁）。このほかにも我々の視野に、⑦古屋の漏り（大成33A・B、AT177「盗人と虎」）、⑧鼠の嫁入り（大成380・AT2031）なども入れてよいだろう。

じつはこの説話のうち、最近最も研究が進んだのは、早くから日本「切り雀」との類似が指摘されてきた、AT554に該当する「腰折れ燕」モチーフの比較研究である。朝鮮の昔話系古典小説『興夫伝』の骨格が「腰折れ燕」モチーフで構想されているので、孫晋泰を始めとするたくさんの朝鮮人研究者が多大な関心を示してきたが、従来はモンゴルで採話された類似伝承のみが注目されていた。それ以外に分布する事例として、すでに閔敬吾によつて指摘された中国の事例（エーバーハルトのタイプインデックスNo.24「燕報恩」）を考慮に入れなくてはならないし、筆者は中国東北部の満州族の事例、そしてチベットに伝承されていた類似伝承を新たに付け加えた（松原孝俊、1992年、147～166頁）。その後、西脇隆夫によって、ウイグル族・カザフ族・シボ族・ダワール族など西北中国から中央アジアにかけて居住する諸民族、そして西南中国のトウチャ族・マオナン族・ナシ族・ムーラオ族・ヤオ族・チワン族などの類似伝承が報告された（西脇隆夫、1992年、28～35頁）。

こうした広範囲な地域で伝承されていることを前提とすれば、例えば、モンゴルの類似伝承は朝鮮から伝播したと主張する、一部の朝鮮人研究者の仮説などは、今日の類似伝承の分布状態から推測す

る、的はずれに終わる危険を孕むし、むしろ誤りである可能性が大きい。説話の起源地は今日の資料からは不明といわざるとえないが、それでも朝鮮の「腰折れ燕」モチーフは他地域から朝鮮半島に流入した外来の説話であると考えたほうが、正解に近いといえよう。決定的な物証を持たないだけに、じつにものぞかしい限りであるが、当面の考察対象である朝鮮の「手無し娘」にしても、今後多くの類話の蓄積を持つべきであるのはいうまでもないが、それと同時に単独でなく、いわば説話を束にして論じる段階にも達する必要がありはしないだろうか。つまりある一時期、ユーラシア大陸東北部を、例えば「腰折れ燕」モチーフや「手無し娘」モチーフなどが束になつて、移動・伝播・流出していくた可能性を想定してみたいのである。

しかしながら、日本を除外した、東アジアの「手無し娘」は、第一に構成モチーフに①偽の赤子、②科挙、③手紙のすり替えの3点を共通に持ち、第二にその分布がちょうど中国大陸の周辺部（モンゴル・中国の東北地方・朝鮮半島・奄美諸島）であること、そして第3に「夫の科挙受験モチーフ」を持つことは、この科挙選抜制度に親しい者たちによってのみ伝承されることからして、どうしても中国大陸こそ、朝鮮の「手無し娘」の故郷であつたと見るべきであるまいか。

今後は中国大陸から口頭伝承資料の採集報告を待ちつつ、あるいは元曲、公案小説類などからの発見を期待しておきたい。

八

「朝鮮の『手無し娘』」のふるやみ」という題目を掲げて、結局は朝鮮の「手無し娘」はどうやら中国大陸が故郷でありそうだとしか推論できないが、それにしても曹喜雄が直感的に、娘の両手が切断され、再生されるモチーフに注意して、

「(1)の説話(松原注…「手無し娘」)に対するしき、よいかしら異国で外来的な感じを捨て切れない」(曹喜雄、1989年、48頁)

と述べているのは、たいへん興味深い。この直感的な印象は各地域の専門家も口を揃えて述べており、一致して「『手無し娘』は比較的近い時代に語り始められた」という作業仮説に逢着している。筆者も、同様な思いを抱いている。

最後に韓国京畿道広州郡山谷里出身者からの聞き取り調査したモデルを紹介しておきた。(1992年)。当年、64才になる尹起炯氏は、幼少時、したがっておよそ半世紀前、住んでいた村に「漫畫鏡」(マンガトキン)語りの行商人を見たという。彼の記憶によると、およそ1銭払えば、朝鮮語で語られた「薔薇紅蓮伝」もしくは「手無し娘」を観覧できたそうである。残念ながら、尹氏は詳しいストーリーを思い出せないばかりか、村回りの語り手たちの居住地などの情報を持っていないため、これ以上の追及は断念しなくてはならないが、今後、詳細な報告ができる段階に達するかも知れない。

注

- (1) 三原幸久、1989年、24~26頁
- (2) 安藤昌江、1990年、14~16頁および1991年、31~48頁
- (3) 小池ゆみ子、1991年、115~133頁
- (4) 斎原孝守、1990年6月、1~8頁および1990年7月、1~7頁
- (5) 曹喜雄、1989年12月、33~56頁および朱鐘演、1980年、193~220頁
- (6) 全聖鐸「薔薇紅蓮伝の異本考索」『春川教育大学論文集』第16号、1976年
これまでに管見に入ったかぎりの古典小説「薔薇紅蓮伝」の研究史は、次の通りである。
金台俊「薔薇紅蓮伝研究」『三千里』第12号、1936年
金台俊「薔薇紅蓮伝研究」『朝鮮文学』3巻4号、1937年
金台俊「薔薇紅蓮伝と他の公案類」『朝鮮小説史』学芸社、1939年
金台俊「薔薇紅蓮伝」『朝鮮』300号、1940年
朴貞子「薔薇紅蓮伝考」『國語國文學研究』(梨花女子大学国語国文學会)第3号、1961年
全聖鐸「薔薇紅蓮伝の一研究」『國語研究』第13号、p. 1-21、1967年
全聖鐸「薔薇紅蓮伝の国漢文と漢文本の内容と著作年代に関する考察」『春川教育大学論文集』第8号、1970年、p. 43-60

- (12) 金基鉉「薔花紅蓮伝の形成」『韓国文学論叢』一潮閣、1972年
 金基鉉「薔花紅蓮伝の一異本」『語文論集』第14・15号(併記)、(同麗大學校國語國文研究会)、1973年、p 157-166
- 全聖鐸「薔花紅蓮伝の開闢説話収」『春川教育大學碩友論文集』第2号、p 1-23、1974年
- 全聖鐸『薔花紅蓮伝研究』(高麗大學校教育大學院碩士論文) p 1-34、1975年
- 禹快濟「薔花紅蓮伝考」『韓國文學論』日月書閣、1981年
- 禹快濟『韓国家庭小説研究』高麗大學校民族文化研究所、1988年
- 禹快濟「薔花紅蓮伝」『韓國古典小説作品論』集文堂、1990年
- (7) (6) に列挙した研究田録中の禹快濟、1990年を参考のいふ。
- (8) そうではあっても伝説の実態が不明である以上、我々の憶測にはあくたく成立の余地もないという反論も予想されよう。したがって百歩譲って、史実から伝説へと移行した後、やがて小説化される過程で、失名の小説の作者は昔話「手無し娘」譚と無縁に構想しなかったとも考えておきたい。
- (13) 朝鮮の説話詩集には、「有ねな『三國遺事』卷2、景文大王の條にある「王様の耳はロバの耳」を初めとする、明らかに西方起源と思われる説話が散見される。次ぎに列举したもののは、その代表的な事例である。
- 1 「禦眼橋」「鈴猫乗馬」…「Belling, the Cat」(AT. 110)
 (宋世琳著、16世紀初め、『古今笑叢』所収)
 - 2 「司五志」「貓頂懸鈴」…「Belling, the Cat」(AT. 110)
 Jacobi, The moden Library ©和波少年文庫(21, 26, 38),
 番良守著訳かみの翻訳

(洪萬宗・著、1678年)

③

『奇聞』「狡兔脱禍」…「The Tail-Fisher」(AT. 2) 「虎死狐計」…「The Theft of Fish」(AT. 1) 「蠅蝠不參」…(AT. 222A) (著者不明、李朝後期か?)

ノリの問題とすべきは、『イソップ物語』の流入時期である。

具体的な証拠も無く、まあどうあらが、一つの仮説として、日本の『伊曾保物語』などの南蛮文学の朝鮮半島への流入を、想定しておくれやではあるまい。

[参考文献]

〈日本語〉

- 安藤昌江「高野山女人堂由来記」『京都民俗』第80号、京都民俗学談話会、1990年、15～164頁
- 安藤昌江「手を切られた女の子」『京都民俗』第9号、京都民俗学談話会、1991年、31～48頁
- 斧原孝守「中国東北地方の『手無し娘』」(1)『比較民俗学会報』第11卷6号、1990年6月、1～8頁
(2)「中国東北地方の『手無し娘』」『比較民俗学会報』第11卷7号、1990年7月、1～7頁
- 金台俊「薔薇紅蓮」(2)『朝鮮』39号、1940年
- 小池ゆみ子「手無し娘」の話型研究』『話語の成立と展開』(土曜会 論論集) 1991年、15～26頁
- 小島環禮「Distribution of Lost Fish-Hook」『比較民俗学会』

第2卷1～8号合併冊、1981年8月、2～26頁

崔仁鶴『韓国昔話の研究』弘文堂、1976年

西脇隆夫「シルクロームの『脚折れ燕』」『比較民俗学会』第13卷

二原幸久「昔話『手無し娘』の伝承と伝播」『民間説話』世界思想社、1989年22～26頁

〈韓国語〉

- 孫晋泰「北方民族影響の民族説話」「韓国民族説話の研究」1946年、85～138頁

- 曹嘉雄「手無し娘」(AT706) 改『水余成著説博士還甲紀念論叢』1989年12月、33～56頁

- 朱鐘演「韓国童話と独逸 Märchen の比較研究試考」『韓國學論叢』(国民大学校韓国学研究所) 第3輯、1980年、193～220頁

- 朱鐘演「韓國の伝来民謡とディッジ Grimm 童話との比較研究」『手無し娘』『国民大学校語文学論叢』第11号、1992年2月、19～39頁
(井川達也・たかとし／神田外語大学)